

■■メールマガジン「静岡県防災」第46号■■

～ 東日本大震災から13年 ～

能登半島地震の報道を見ると、当時、小学生だった方が成人し、災害ボランティアとして能登半島の被災地活動を行ったという記事を見たり、県庁にも学生時代、東日本大震災を経験し、防災を志して入庁した職員がいます。

また、先日、県社会福祉協議会が主催する災害ボランティア研修に参加しましたが、20代前半の市町社会福祉協議会職員の参加も目立つようになってきました。

災害発生時には彼ら市町社会福祉協議会職員が、各市町の災害ボランティアセンターの運営を担っていくことになるのです。

一方、本県では、「2009年8月11日駿河湾の地震」（最大震度6弱）や「2011年3月15日静岡県東部地震」（最大震度6強）以降、大きな地震を経験していません。

このため、県内児童・生徒を対象に行っている「ふじのくにジュニア防災士養成講座」を受講した小学生の、「静岡県では大きな地震がないので、南海トラフ地震が起きる可能性がある」と初めて知りおどろきました」というレポートを見ますと「東海地震がいつ起きても不思議ではない。」と言われながら育ってきた者としては、ジェネレーションギャップに軽くショックを受けるとともに、若い世代への啓発の重要性を痛感します。

引き続き、児童・生徒への防災教育を推進するとともに、県民の皆様への防災啓発を実施していきます。

あらゆる世代で、協力して災害に立ち向かいましょう！！